

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220202	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	過去120年間におけるアジアモンスーン変動の解明	研究代表者 (所属・職) <small>(平成31年3月現在)</small>	松本 淳 (首都大学東京・都市環境科学研究科・教授)

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、モンスーンアジア各地の1950年以前の気象データを紙媒体等からデジタル化し、120年間以上にわたる変動を詳細に分析しようとするものである。デジタル化作業は概ね順調に進捗しており、旧英領インドなど、作業が難航した部分もすでに問題は解決され、アジア各地における降水特性や台風、水稻栽培等の長期変動について数多くの新しい知見を得ている。その成果については、多数の国際学術雑誌に掲載するとともに、新聞発表等も行っている。

現時点では、東アジアに関するデータ分析が、日本を対象とするものを中心としているため、今後は分析対象の地域的範囲を拡大して、アジア全域での分析との接続を図ることが期待される。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	本研究により、旧英領ビルマと東ベンガル、戦前・戦中期の中国、西領・米領フィリピン、明治・大正期の日本各地に関するデータのデジタル化が完成した。それらを基に、気候変動についての新たな知見をもたらす論文が多数の国際学術雑誌に発表されているほか、2018年には世界気象機関(WMO)傘下の国際研究プロジェクト(ACRE)の年会及び関連シンポジウムをアジアで初めて東京で開催するなど、国際的な成果発信も十分に行われている。